

渡辺よしてる

区政レポート027

ジェンダーギャップと

母子手帳について

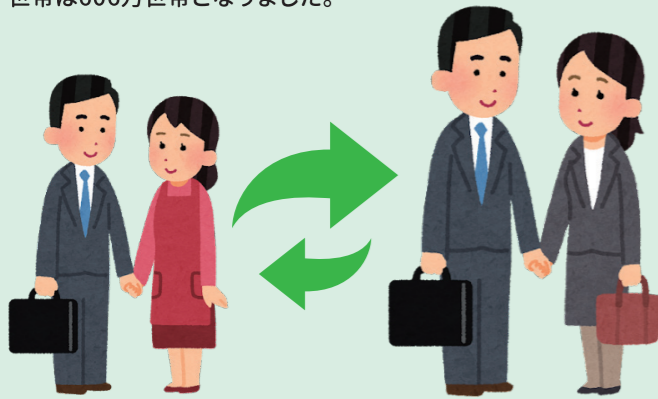
区政に関する一般質問

紅梅小・赤塚第三中出身!
地元生まれ、地元育ち!!

Q ジェンダーギャップについて

共働き世帯と専業主婦世帯の逆転

1980年(昭和55年)は、夫が働き、妻が専業主婦という家庭は1,114万世帯、一方、共働き世帯は614万世帯でした。1997年(平成9年)に共働き世帯と専業主婦世帯は完全に逆転をし、2018年(平成30年)には、共働き世帯が1,219万世帯、専業主婦世帯は606万世帯となりました。



2割の男性しか家事をしていない

女性は家庭、男性は仕事という価値観は変化し、共働き世帯が多数となりましたが、家庭の中を見ても、相変わらず女性が家事・育児、男性が仕事のままであることが総務省の社会生活基本調査で明らかになりました。共働き世帯での家事・育児の時間は、妻が4時間54分、夫が46分と、約6.5倍もの違いがありました。1990年代の夫の家事・育児時間は20分ですから、約20年かけて2倍以上増えたようにも見えますが、妻と比べると大きな差があることは否めません。6歳未満の子どもを持つ共働き世帯で、父親が家事を日常的にしているのは2割、子育てを日常的にしているのは3割。つまり、約二、三割の男性しか日常的に家事や育児をしていないのが実情です。

妻にとって飲み会は貴重品

妻側、女性側の不満では、仕事で疲れて帰ってきて、子どもの食事やお風呂、寝かしつけなど、家事・育児を行っている中、夫側、男性側は、お酒を飲んで帰宅など、夫婦間でのジェンダーギャップが生活の中にあるのは明らかです。例えば、お酒を飲みに行く飲み会に関しては、特に日用品のようにいつでも飲みに行ける男性側に対して、女性側は、夫とスケジュール調整を行い、段取りを組まないと参加ができない、まさに貴重品となっている現状も夫婦間でのジェンダーギャップの1つと言えます。

そこでお聞きいたします。ライフステージに応じたジェンダー平等の啓発は必要不可欠です。本区における固定的性別役割分担意識など、ジェンダー平等に関する現状と今後の課題解決の方向性をお示ください。



A 区長の回答

令和元年11月に実施した区の調査においては、家事・育児に携わる1日当たりの平均時間について、男性の大半が平日・休日とも2時間未満にとどまっております。2時間以上が大半の女性を大きく下回る結果が出ております。そのため、幼少期の早い段階からジェンダーに対する偏った見方をしないよう、啓発を行うことが重要と考え、今年度からライフステージに応じた啓発ツールの作成を進めていきたいと考えています。

Q 母子手帳について

夫からのサポートが得られない!

育児ママを対象とした産後についての調査では、男女間、夫婦間での意識の違いがありました。産後に夫が仕事を休んだり時間を短縮してくれたので助かったなどの意見がある一方で、産後に会社で夫が出産祝いと称する飲み会に参加し、ワンオペで過ごすことになった不満や、授乳中にご飯まだ?と言われるなど、意識にギャップがあるのが見受けられます。ママさんが、第一子を妊娠、出産を機に仕事を辞めた理由で、子育てをしながら仕事を続けるのが大変であった、夫からのサポートが得られなかったなどが最多です。男性の家事・育児への参加ということだけではなく、男女での仕事と育児の両立という大きな環境整備は、言い換えれば、お互いさまに支え合うことが重要と言えます。

家事関連時間の1日当たりの	妻	4時間 54分
	夫	46分

6.5倍の違い

こども手帳と父親の育児参加

足立区などは、母子手帳のサブタイトルとして、こども手帳と表記し、父親の育児参加を促す情報を記載しております。

このような取組は、育児参加での意識の共有に非常に有効であると考えます。育児での意識の違いは、育児の大変さを理解されないことです。それは、育児記録やふだんの家事・育児の情報共有が難しいことや、パートタイムの妻に対して、夫は自分のほうが働いているという意識をしまいがちですが、パートタイムでもフルタイムでも、家事や育児の時間を含めるとフルタイムの夫より長時間働いているのに、何もしてくれない男性に納得いかない面が女性側にはあります。このように見えていない部分が多く、意識に差があると言えます。

渡辺よしてるプロフィール

- ◇稚竹幼稚園 ◇志村第五小学校 ◇紅梅小学校 ◇赤塚第三中学校
- ◇都立北野高等学校 ◇専修大学法学部法律学科 中退
- ◇菅直人事務所 学生インターン ◇衆議院議員 秘書 ◇料理人(板前) ◇専業主夫
- ◇2019年(平成31年) 板橋区議会議員選挙で初当選
- ◆妻と娘の3人暮らし ◆1987年(昭和62年)10月16日 生



@yoshiteru62		@yoshiteru62		OFFICE_YOSHITERU_WATANABE		LINE@ 友達募集中!		公式サイト	http://www.yoshiteru.jp/

成長記録などのデジタル化を

意識の共有では、近年では、妊娠中の記録、周期や成長が共有できるアプリがあります。妊娠中の妊婦健診や出産後の健康診査、予防接種の記録など、母子健康手帳の記録や成長記録をデジタル化することで、成長の過程をグラフ化して確認することができるなど、本来の母子手帳と併用して使用されるケースがあります。このように母子手帳も時代と共に変化しております。

ここでお聞きいたします。本区において、母子手帳、母子健康手帳の名称について、区の見解をお聞かせください。

また、父親の育児参加で重要になる情報の共有化、デジタル時代を見越し、妊娠記録や成長記録など、妊娠・出産・育児期を継続的にサポートするアプリの導入などを提案いたしますが、区のご見解を伺います。

A 区長の回答

母子手帳の名称について

母子健康手帳は、母子保健法に基づきまして、妊産婦、乳幼児に対する健康診査及び保健指導の記録を行うことが規定されております。また、父親が母子の健康について理解を深め、乳幼児期から子育てに積極的に関わっていくために、母子健康手帳を活用する視点も必要であると考えます。母子健康手帳が、妊産婦と子どもの健康の増進、子育て期の家庭の記録となるよう、名称や内容について研究をしていきたいと考えています。

アプリ導入について

予防接種や健康診査の記録など、子どもの成長について情報を共有することは、家族が共同で子育てをする上において重要と考えます。現在、子育てに関する情報を提供している子育てナビアプリにつきましては、導入から5年が経過し、アプリの高機能化が求められていると感じています。アプリ更新時においては、母子健康手帳を補完する機能の導入などについて検討をし、子育て支援サービスの向上を図っていきたくと考えています。